

ふたりと三びきの長い旅

エリカ・リレック作 矢川澄子訳



© 1973

8397-148 122-1002

ふたりと三びきの長い旅 エリカ=リレグ

少年少女・新しい世界の文学—22

NDC 943 リレグ, エリカ 21cm 246 学習研究社  訳者との契約により検印廃止	訳者—^{やがわすみこ}矢川澄子 発行人—古岡秀人 編集人—石井和夫 印刷—壮光舎印刷株式会社 製本—有限会社 黒田製本所 発行所—株式会社 学習研究社 東京都大田区上池台4の40の5 郵便番号145 振替東京142930	落丁・乱丁本は おとりかえ いたします。 PRINTED IN JAPAN 4801
---	--	---

* この本についてのお問い合わせ、製本上のミスなどがありましたら、下記あてにお知らせください。
文書は、東京都大田区上池台4-40-5 (〒145) 学研 ユーザー・サービス本部事務局 児童図書係
電話は、東京 (03) 727-1600 東京 (03) 720-1111 内線 352, 353

少年少女・新しい世界の文学

22

ふたりと三びきの長い旅

エリカ=リレッジ作

矢川澄子訳



購入年月日

名まえ

学研

FEUERFREUND

by Erica Lillegg

Original German Edition published
by K. Thienemanns Verlag, Stuttgart

Copyright © 1957

Japanese translation rights arranged
through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

★

訳者紹介

東京生まれ。学習院大学独文学科卒業。東京大学美学科中退。
創作に「架空の庭」(弥生書房)があるほか、「暦物語」(現代
思潮社)「クレーン」(福音館書店)「イルカの夏」(岩波書店)
「たるの中から生まれた話」(学習研究社)などの訳書がある。

★

さし絵

F. J. トリップ

★

丁デザイン

口はるみ



ふたりと三びきの長い旅

もくじ





12	煙突掃除夫 えんとつそうじふ	106
11	魔女たち まじよ	93
10	身の上話 みうへはなし	91
9	あらたなお仲間 なかま	80
8	ヒツチハイク	60
7	旅立ち たびだち	56
6	つらい季節 きせう	53
5	だから雌牛のいうことをきけばよかった！ めうし	45
4	ふくしゅう	37
3	かさねてのご忠告 ちゆうこく	27
2	村 むら	15
1	ヒノトモ	7



242	240	235	219	211	197	181	162	153	141	124	115
訳者あとがき やくしゃ あとがき	ほんとのあとがき	あとがき	苦しみの はてに くる	四月 ばかり がっ	ただでは いやよ	手と足と	道にまよ つて…… みち	もめごと	またしても 失敗 しっぱい	黒ければ 悪者か わるもの	初舞台 はつぶ たい

Ⅰ ヒノトモ

みなしごにはよくあることですけれど、本名とはまるきりべつの名まえが、いきなりつけられてしまうんです。一種のあだ名とか、かわった呼び名とかいったものですが、ついたらさいご、それっきり、いやでもおうでも、そう呼ばれっぱなしでいるよりしかたありません。なぜって、きっと、その子たちをそんな名まえからまもってくれるはずの、とうさんかあさん親戚の人などがいないせいでしょう。その子たち自身にしても、もちろんよわくって、ひとりでもななに反対するわけにもいかないんです。

ヒノトモというのだって、そんなふうにしてしまった名まえで、これしか呼び名がなかったわけではありませんし、ついてからだって、そんなにたっぴはいませんでした。ともあれ、この名まえはご本人にも氣にいらなくもなかった、というのは、まえにもほかの名まえがあることはあったのですが、考えてみれば、その名だって、さほどたいせつだとも思えなかったからです。

もとはといえば、みんな、この子が「ジジョウノアル」子だという、かなしむべき事実のせいでした。この「ジジョウノアル」ということは、視学官がきたときに受け持ちの女の先生がつかったものですが、先生にしてみれば、クラスにひとり「ジジョウノアル」子がいたって、

ちっともかまわなかったでしょう。ヒノトモだって、先生がまちがってるとは思いませんでした。けれど、でもいつぼう、ほかでもない自分がその「ジジョウノアル」子であるというのは、どうもあんまりぞっとしませんでした。それよりか、ほかの百姓の子たちとおんなじでいられたほうが、よっぽどしあわせだったのですし、そもそものその晩のことだって、つとめてわすれようとしているくらいだったのです。

その晩というのは、あらしで、村じゅうの火という火が、どうもよく燃えなくなってしまうたのでした。風のせいです。風が煙突や煙出しからまいこんで、灰をふきちらし、台所をふきまわり――、まあ、それはそれはひどいざまだだったのです。ふくならふくで、のこりの炎をかきたてて、ぼうぼう燃えあがらせてくれればよかった、というのは、その夜は、あらしばかりか、寒さもことのほかきびしかったからです。そのあらしと寒さとのさなか、なにやら包みをかかえた女の人がひとり、おりからこの村にやってきたのでした。

女の人は、つまりかあさんのこと、包みはこの子、かれ、つまりヒノトモでした。それで、この子の敵ども、でかのうすのろヨックルや、ちびのこすからマツツは、いまだにかれを「ぼろ包みやーい」なんて呼ぶんです。まあいい、あんなやつら、いつかは見かえしてやるつもりです。あの子たちふたりあわせたより、もっと強く大きくなったらばですけれど。

さて、女、つまりかあさんは、家から家へ戸をたたいては、一夜の宿を乞うてまわりました。けれども、村人たちは、「よそ者」とか「流れ者」とかをおそれていたのです。かあさんみ

たいな女の「流れ者」だってそうです。この「……者」ってどういう人なのか、ヒノトモは考えてみたのですが、あきれたことに、「者」なんて人はどこにもいないのでした。とすれば、かあさんは「流れなんとか」だったんでしょ。この「流れ……」というのだって、ほんととは流れてきたのではなく、足であるいてきたわけなのです。おそらくは、そのためもあって、かあさんはひどくくたびれ、ひどくみすぼらしいすがただったそうです。そりゃあもう、くたくたで、いまにもたおれそうだったよ——と、話がここまでくると、どうしても、聞いているヒノトモの目には、なみだがちよっぴりうかぶのでした。

それでもとうとう、いちばんしまいの家で、かあさんはうけいれてもらえたのでした。その家のあるじは、道路工夫だったのですが、もしかすると職業がら、道とおる人のことをよくわきまえていて、流れ者だって、流れ者でない住みつき者とすこしもちがわぬ人間であることを、知っていたからかもしれません。

道路工夫とそのおかみさんは、この見知らぬ女を、子どものうようよししている台所へまねきいれました。そうです、道路工夫には子どもが大ぜいあったのです。工夫は、女にいいました。干し草を寝床にすりやいいさ、それよりさきに、このいまいましい火さえ燃えたってくれりゃ、うちの者といっしょにスープをごちそうしてあげられるんだがね。すると女は、いえ、ありがとうございますが、あまりつかれてて、食欲もおこりませんし。ただ、できればこの子に、ミルクを一ぱいめぐんではいただけますまいか。と、そこまでいうと、女は包みをほどこ

てみせました。中には、かれ、ヒノトモが寝かされていたのです。女は子どもを見せて、なにやら耳なれぬひびきの名で、二度三度、呼びかけました。

やがて、ミルクが持つてこられました。

女は子どもを、かまどのそばに寝かせてミルクをのませにかかりましたが、そのときだそうです、あぶなげない、みごとに美しい炎がぼつとついたので。火はどうどうと燃えあがり、熱をはき、おかげで道路工夫のおかみさんは、あつというまにスープをつくつてしまいました。

そのあと、見知らぬ女、つまりかあさんは、ヒノトモといっしょに、干し草にもぐつて寝ました。そして、夜があけたときには、かあさんはどこかへいなくなっていて、あとにはヒノトモだけが、じょうずに干し草につつまれて寝かされたまま、ギャアギャア泣いていたというわけです。そしてこの点が、ヒノトモには、いまさらながらふしぎで、くやしくてたまらないのです。もちろん、自分が泣いてたということではなくって、かあさんがいなくなったこと、そして、それっきり、二度とふたたびもどつてきてくれなかったということが、です。

どうしてかあさんは、それっきり、二度とふたたびもどつてきてくれなかったのか？ ヒノトモはくりかえしくりかえし首をかしげるのです。でも、そんなことは自分で考えこむだけで、けつしてひとにきいたりしませんでした。きいたって、どうせみんな肩をすくめるだけだろうと思って、びくびくしていたのです。ヒノトモとしては、こんな重大問題にたいして、肩をすくめてなんかほしくありませんでした。

さて、こうして、かあさんはいなくなるし、あかんぼうは干し草くさの中でギアギア泣ないて
いるしで、道路工夫どうろこうふは、まあいいや、どうせ大ぜい子どもがいるんだから、ひとりぐらいふえ
たってかまわねえといつて、ヒノトモをそのまま手もとにひきとることにしました。けれど
も、かあさんが呼よぶときにつかった、あの耳みみなれぬひびきの名まえは、だれにも二度どと思おもいだ
せませんでした。で、子どもには、ペーターだとかパウルだとかハンスだとかいったような名
まえがつけられたのでした。

いまではもう、ヒノトモもあかんぼうではありませんし、この話はなしがでるたびに、なにがしや
くにさわるといつて、自分が自分じぶんにふさわしい名まえをつけてもらえなかったということほ
ど、しやくにさわることはありません。それならいったいどんな名まえだったらよかったか、
ヒノトモは何日なんにちとなく、頭あたまをかかえて考えかんがこんでしまったものです。ア行ぎようのか、カ行ぎようのか、そ
れともサ行ぎようのでしょうか？ けれども、そんなに考えかんがてみたところでなんの役やくにもたないし
ようこには、ヒノトモは今週こんしゅうペーターだったかと思おもえば、つぎの週しゅうにはハンスにされていて、
またそのつぎの週しゅうにはフランクツにされる、といったぐあいだったのです。なぜって、やしない
親おやのとうさんかあさん兄弟姉妹けいていしまいだれひとり、はっきりヒノトモの名をきめてくれなかったから
です。

けれども、やがてしだいにはっきりしてきたことがひとつあります。この子は、火をあつか
うことがとてもじょうずだったのです。これはなかなか貴重きんちゆうな才能さいのうであることは、ヒノトモの



そだったのが、人里はるかにはなれた小さな村だったことを考えあわせればわかることです。この村は、高い山あいにあつて、ただ一本の細い道が下からつうじているきりです。流れ者ならともかく、ふつうなら、だれだって、こんな道はごめんです。ですから、村には、めったに、よそ者はやってきませんし、村人たちも、外の広い世界でなにがおこっているかなんて、べつに知りたいとも思わないのでした。

村ではすべてが、むかしながらのありさまでした。かまどだってそうでした。がっしりした石できずいた大きな大きなかまどで、その上で火をおこすのでした。上からはかぎがさがつていて、そこにかまをかけ、かんたんな料理などをしました。または下に五徳（灰にたてて、やかんなどをかける三本足か四本足の輪）をすえて、その上になべをのせることもありました。なべはまっくろ、かまもまっくろ、台所も年月とすすと煙でまっくろでした。なにしろ、ただ火を燃やすだけなので、台所じゅうがひどくいぶるのです。ですから、だれか、たくみに手早く火をおこせる人、ぼうぼうと煙出しまでまっすぐ立ちのぼるような、さかんな火を燃えたたせることのできる人がいれば、それはもう、みんなからとてもうやまわれ、ちょうほうがられることうけあいでした。

この火おこしのわざを、ヒノトモは、まだほんのあかんぼうのうち、ちっちゃなあんよでやつと立つちできるかできないころから、早くもこころえていたのです。やしないかあさんである、道路工夫のおかみさんも、これにはあいた口がふさがりませんでした。だって、この子がよちよちかまどに近づいて、木っばをちょっとほうりこんだと思ったら、いままでどうもうま

く燃えつかないでしょぼしょぼしていた火が、とたんにいきおいよく、あかあかと燃えあがったのです。そのようすときたら、なにかこう、火がこの子と、といってわるければ、この子が火と、まえからなかよしかったんだ、といっているみたいでした。

それで、この子はヒノトモという名にきまってしまいました。ご本人も、これでまんぞくしたというわけです。

2 村

まんぞくといえ、ヒノトモはおおむねまんぞくしていたのです。なにしろ、村から一歩もでたことはないし、ほかの村はもちろん、町なんてもののはてんで知っちゃいないので、いまいるこの村はどすてきなところはどこにもないと思ひこんでいたのです。ヒノトモにしろ、ほかの村の子たちにしろ、みんな、すばらしい日々をすごしていました。いつでもなにかしらすることがありました。やりたいと思ひつたことをぜんぶやりとげるためには、一日二十四時間ではとても足りないほどなものでした。

なにをするかは、もちろん、季節によってちがいました。それにまた、かならずしも自分たちのすきなことだけしようというわけにもいかなかったのです。たとえば、夏休みのはじめなど、子どもたちはきまっていらいらさせられたものです。一年のあいだ、待ちに待ったせっかくの夏休みなのに、さて、子どもたちが学校もなし、したがって宿題もないとわかるがはいか、親たち、やしない親たち、おじさんお婆さんなどが、あつというまに仕事を見つけていつけるのですから。そんな仕事、子どもたちにはまったくうんざりで、なんのとくにもないりっこないのです。いったい、ぼくたちが学校へいついて、この仕事をやってあげられないときは、だれがそのぶんをかたづけていたんだらうと、子どもたちは首をかしげるのですが、